

## 能界展望(平成九年)

ニシノ, ハルオ / 西野, 春雄

---

(出版者 / Publisher)

野上記念法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research  
Institute of Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Nogaku kenkyu : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究 :  
能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

23

(開始ページ / Start Page)

197

(終了ページ / End Page)

210

(発行年 / Year)

1999-03-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020526>

## 能界展望（平成九年）

西野春雄

### 概観

平成九年（一九九七）の能楽界は、鏡板の松の絵をめぐって老松か若松かとマスコミの話題をにぎわした名古屋能楽堂が、四月、名古屋城正門前にめでたく竣工し、開館したことを初めとして、各地で能楽堂の建設への動きが続出していることが特筆される。名古屋能楽堂は平成八年春に開場した横浜能楽堂に続く能楽界の慶事で、このほか豊田市能楽堂（豊田参号館8階）・新潟市市民芸術文化会館能楽堂など、地方での能楽堂建設の動きは活発である。

一方、一月に関根直孝氏・善竹圭五郎氏、二月に藤井久雄氏・鶴澤雅氏、三月に奥善助氏・鶴澤壽氏、四月に寺井啓之氏・敷村鐵雄氏、六月に櫻間辰之氏・野村祐丞氏、七月に田中正夫氏、十月に瀬尾乃武氏、十二月には筧三男氏と、シテ方・囃子方・狂言方、そして能楽写真家と、訃報が相次いだ年であった。詳しくは物故者の欄を読んでいただきたいが、時代の変わり目という感を強くするとともに、能界を支えて来られた長老の方々の死を悼み、働き盛りの役者の急逝を悲しみ、無念の思いで見送った。日本能楽協会の会員数も、こ

数年、流儀にもよるが少しづつ減少化の傾向にある。能楽の発展にとって適正規模なら問題はないが、必ずしもそうとは言えない面もあり、後継者の育成は愁眉の急であろう。

ところで、私事にわたって恐縮ながら、筆者は平成八年四月中旬から平成九年四月中旬までの一年間、法政大学在外研究員としてヨーロッパに留学し、ロンドンとパリを拠点にヨーロッパの博物館・美術館を回り、在外能楽面の調査を進め、一年ぶりに帰国したので、平成九年四月中旬までの動きは直接には分からない。ヨーロッパ滞在中、時々耳にする日本の政治・経済・社会状況（汚職報道・凶悪事件の続出）などから、日本はこのままでいいのかという危惧をしばしば抱いたが、帰国後、消費税が五パーセントに上がっていたり、社会党がなくなっていたりと、驚くことが多かった。

久しぶりに見た能・狂言からも、正直言って本当にこれでもいいのか、大事なものを忘れてたり失ったりしてはいないか、と思うことが多かった。もし繁栄の真只中にあるとしても、真の繁栄といえるのか、とにかく帰国直後の観能体験は、決して心地いいものではなかった。能楽界も、危機意識の希薄な「日本の平和」そのものにどっぷりつかっている。

しかし、数カ月鑑賞を続けているうちに、いいものを観たという感動もあった。そして、先人たちが苦勞しながら守り伝えて来た能楽は、やはり大切に守り、次代へ送りたいものだと感じた。以下、しばらく能・狂言を見ないで過ごした人間が、久しぶりに見聞した平成九年の能界の様相や出来事を、記録を中心に概観し、二十世紀も終わりに近い能界を展望することにした。

### 名古屋能楽堂開場

能楽をはじめ伝統芸能の振興と文化交流の推進を目的として名古屋市中区三の丸名古屋城正面南に開館した名古屋能楽堂の建物の特色は、名古屋城と調和がとられた入母屋式の屋根、伝統的な日本建築の出隅・入隅を繰り返しながら斜め後方に退く雁行型の、能楽鑑賞にふさわしい日本建築様式の優美な外観と、木の香漂う内装、最新の照明・音響設備を備えた総木曾松造りの能舞台にある。本舞台の寸法は、柱の内法が京間3間(五、九メートル)、橋掛りは、本舞台との角度一〇二、五度、長さ一一、八九メートル、幅が柱の内法二、七メートルある。六三〇席の広々とした見所も特色で、ゆったりと鑑賞できる。また、能楽を紹介する展示室や演能の解説が聞けるイヤホンガイド設備を備えているのも特色の一つ。施設の内容をまとめると、①舞台・見所(固定席630席)、②稽古室(舞台は本舞台と同規模)、③会議室(スクール式99席)、④展示室(230平方メートル)、⑤レストラン(184席)。

構造Ⅱ鉄筋コンクリート造(一部鉄骨造)、平屋建(一部地下一階)。規模Ⅱ延床面積五、二〇〇メートル(中二階を除く)。設置Ⅱ名古屋市、管理Ⅱ財団法人名古屋城振興協会、である。芸どころ名古屋にふさわしく、四月三日からの舞台開き祝賀能も盛大に挙行され、まずは順調なスタートを切ったようである。「能楽タイムズ」「今月の能」欄からも名古屋での催しが暫増している様子がうかがわれる。

問題となった鏡板の松の絵であるが、杉本健吉画伯が描き、本多静雄氏とともに名古屋市へ寄贈した絵が、狩野派以来の伝統的な老松ではなくて、若松の群生であったことに端を発した。その是非をめぐり名古屋市当局と能楽協会名古屋支部ほか名古屋市民、はては東京の評論家も論陣を張り、議論が沸騰。有志による「名古屋能楽堂に老松の鏡板を寄贈する会」が結成され、同会が主体となって募金活動が進め、絵は松野秀世氏が委嘱され年末の完成をめざした。平成十年四月から、同会が市へ寄贈した古典的の老松の絵と、杉本画伯の若松の絵とを一年交替で掛け替えることに落ち着いたという。筆者は後日、本欄執筆のため、実地に確かめようと訪ねた時は老松に代わっていて、話題の若松は展示されていた。

室町障壁画に由来すると思われる能舞台の松の絵は、当時の美意識や時代精神の中で生まれたものであるから、そうした背景や伝統は無視できない。しかし、形骸化した、格調も気品もない松も問題で、画家が新しいものに挑戦し個性を發揮したい気持ちも分かる。だが、往々にして、そうした試み

は成功率が低く、伝統を破壊するものとして世に迎えられないことが多い。私たちは、能舞台にフィットした絵を望む。有名・無名の画匠たちが腕をふるった各地各所の能舞台の絵。私など素人は、前田青邨揮毫の喜多能楽堂の絵がすばらしいと思うが、松の絵専門の画家の言では、あれでも個性が強いという。伝統性と革新性が絶妙に止揚されてこそ現代人の共感と呼ぶ。そして私たちは、何よりも、そこで展開される能・狂言そのものが放つ魅力と感動を共有したい。

### 国立能楽堂関係

#### 【主催公演に初めて女性能楽師の公演】

国立能楽堂では、平成四年から七年まで、公開講座・土曜セミナーで、女性能楽師についてのワークショップを積み重ねて来たが、それらの成果に立って、10月23日、初めて、女性能楽師出演による自主公演《女性能楽師の夕べ》を開催した。番組は、舞囃子「三輪」富山礼子(金春流)、能「百万」山階敬子(観世流)。今後、女性能楽師による公演は、当面、平成十一年まで毎年一回催す予定という。参考までに土曜セミナーのこれまでの流れを左に略記する。

◇平成四年「女性能楽師を観る―演技の基本と作品―」

シテ方観世流の山階敬子・鶴澤久・今村ミヤ子・三木美智子・片平美代子ほかの出演。

◇平成五年「女性能楽師を観る―謡の表現―」

シテ方宝生流の宝生公江・内田芳子・影山三池子・久貫弘

能・石黒実都ほかの出演。

◇平成六年「女性能楽師を観る―囃子の表現―」

鹿取希世(笛方藤田流)・久田陽春子(小鼓方大倉流)・山田利子(大鼓方大倉流)・佐藤宮子(太鼓方金春流)、シテ方金春流の富山礼子・島原春京・仙田理芳・高橋万紗・平友江ほかの出演。以上三回の進行は山中玲子氏。

◇平成七年「女性能楽師を観る―狂言の演技―」

狂言方和泉流の和泉淳子・三宅藤九郎ほかの出演。進行は松本雍氏。

#### 【特別展示 長崎・諏訪神社所蔵 能面と能装束】

10月23日(12月3日)。長崎市の鎮西大社諏訪神社は、二百年以上にわたって神事能が举行されていた歴史をもち、能面や能装束が多数残されている。5月に、鍊仙会の清水寛二らによって復曲上演された神能「諏訪」に使用した面・装束を含む、能面三十八点、能装束二十七点を展観。旧大名家所蔵のものとは異なる、地方能楽の様相の一端を紹介した。

#### 【第6回研究公演】

12月22・23日。第1回から4回までは能と狂言の復曲を試み、第5回からは新作能を取り上げ、歌人馬場あき子氏への委嘱作品「晶子みだれ髪」を世に問うたが、第6回も同じく馬場あき子氏への委嘱作品「額田王」を上演した。

現し身の額田王(老女)の前に、幻の額田王(若い女)が登場し、額田王をめぐる中大兄皇子と大海人皇子の二人の皇子の葛藤など、過去と現在が複雑に交錯する作品。老女の回想に

若き日の自分が現れ、舞台上に老女と若き女が向かい合う場面や、劇中の白村江の戦いの場面など、複雑に交錯する時間観に少し無理があるようにも感じられたが、太鼓を二つ使い、高松塚古墳の壁画の女性を思わせるような古代色たっぷり的一面・装束など、その斬新な音楽や演出がきわだち、新聞や雑誌の劇評もおおむね好評であった。しかし、枝葉のみ肥大し、根幹を忘れた作品という批評も耳にした。

新しい試みに対し評価したい面も多々あるが、最近の新作能にはしばしば装飾過多の傾向が見られ、この「額田王」にもそれが感じられた。

### よまやまな催し

各流各派の中心的な発表の場である月並能や定期能をはじめとして、追善会や襲名披露、あるいは最盛期の時よりは幾分減少した全国各地の薪能やホール能、あるいは趣向を凝らした蠟燭能など、平成九年も各種各様の催しがあった。いくつかの新作能や復曲能をはじめとして、意欲的な公演も少なくなかった。ここでは、その一部を紹介したい。

#### 《清水寛二「諏訪」》

5月30日。国立能楽堂。能「諏訪」復曲実行委員会主催。鎮西大社諏訪神社主管。地照舎(清水寛二主宰)制作。寛文十二年(一六七二)、諏訪社能太夫早水治部によって作られた脇能で、いわゆる所謡(地方謡曲)の一つ。長崎の人たちの絶大な後援による復曲のようで、信仰のエネルギーを感じた。

全体に荘重でいいが、脇能らしい颯爽かつ剛毅な風情もほしい。後ジテ諏訪明神が用いた古怪な驚鼻悪尉の面がエキゾチックに見えたのはおもしろい。数百年ぶりに復活した「諏訪」が村おこし町おこしの一役を担うといい。

#### 《片山九郎右衛門「松山天狗」》

片山定期能企画公演。〈源平争乱期に渦巻く男達の執念〉。8月29・30日。初日に片山九郎右衛門が演じた「松山天狗」は観世流現行曲ではなく、平成5年、能劇の座で復曲した作品で、これまで大槻文蔵・梅若六郎・観世鍔之丞らによって数度上演されてきた。本曲の上演に関連して『能楽タイムズ』平成9年10月号に堂本正樹氏「新作能「知恵子抄」と、能界の版權意識」(下)と題するレポートがある。「見事な出来で、温和で保守的な、立場専一の片山とは思えない活気があり、今までに無い「明日」まで望見させた」と記し、さらに氏は当日の番組に復曲台本・作曲・演出などを明記していたことを是とし、「復曲に費やされる芸術家の膨大なエネルギーは、費用もさる事ながら、その経験と才能の積み重ねから来る実質で、これには敬意が払われて当然である。上演料というのでは無く、そうした敬意の手続きが、現場主義の安易さを無くし、それを乗り越える責任感を与えることになる。どんなに忙しい現代人でも、新作や復活には作者や作曲者の了解を取る時間を惜しんではならぬ」と述べ、「狂言役者も含めて能役者は、仲間内での了解は重んじて、屢々こうした知的な連係を欠落させる」と指摘。氏は座談会「能の著作権を

考える―復曲で生じた諸問題」(『梅若』平成9年4月号)でも能と版權の問題を詳しく論及しており、版權意識の欠落ないし希薄が顕著な近年の諸活動に警鐘を鳴らしている。

#### 《梅若六郎「当願暮頭」》

梅若六郎舞台生活45周年記念梅若六郎の会。梅若学院。9月9日。堂本正樹能本作成・演出、梅若六郎作曲・演出。梅若六郎・梅若晋矢・宝生閑ほか。平成3年12月、法華八講など宗教色を強く出した国立能楽堂研究公演での復曲とは別に、原作に近い形で復曲し、人間性を追求した。「一つの台本が視点の移動・解釈の変更で、これだけスタイルが変わり得るという、能の可能性の豊かさ」を示した。『梅若』平成9年12月号に松本雍氏の舞台紹介をかねた批評(写真数葉)と、村瀬平左衛門氏の拝見記、それに上演詞章が掲載されている。

#### 《相国寺献能》

創建六百年法堂修復落慶・金閣寺北山殿 創建六百年記念献能。非公開。10月10日。相国寺特別舞台。番囃子「翁」片山九郎右衛門、狂言「三本柱」茂山忠三郎、能「朝長・懺法」観世清和・太鼓小寺佐七ほか。

創建の頃から観音懺法を今に伝える相国寺での献能の眼目は「朝長」で、観世清和は本曲にのみ用いる観世家伝来、足利義政拝領という蜻蛉模様の単法被を着用して勤めた。当日の様子は『観世』平成9年12月号特集・相国寺能に詳しく、山中玲子氏の観能記や小辰恭子氏の「勝虫模様単法被」についての記事などが写真入りで掲載されている。

#### 《楽劇・野村万蔵ほか「唐人相撲」》

10月28日。歌舞伎座。楽劇コースケ事務所制作。中国の皇帝(万蔵)や日本の相撲取(万之丞)以上に、通辞(野村良介)が大活躍し、歌舞伎座の舞台空間を効果的に活用した由。

#### 《観世栄夫古稀の祝い「檜垣」》

11月16日。国立能楽堂。舞囃子「枕慈童」観世鏡之丞、狂言「万歳太郎」野村万蔵ほか、能「檜垣」観世栄夫ほか。秘曲とか重習いといった権威付けや格付けを解き放した感じを与える、ごく自然な老女物で、これほど感動した「檜垣」は近ごろなかった。加藤周一氏が「夕陽妄語」(『朝日新聞』平成9年11月19日夕刊)でこの日の舞台を的確に記している。

また、古稀を祝う乱能が12月25日、国立能楽堂で各流各役総出演の趣で開かれた。「翁」茂山千作、能「自然居士」野村万蔵ほかの番組で、いずれも遊び心あふれる演技に大いに沸いた。研究者も狂言「御田」(横道萬里雄ほか)をまじめに上演。私事で恐縮ながら筆者も七人の早乙女の一人で出た。

#### 【新作能の動き】

新作能のあいづく上演も近年の傾向のひとつだが、この年も話題になった催しが少なくなかった。日本の古典はもちろん、キリスト教やシェークスピアの戯曲に取材したものも少なくない。①②⑤などは再演・三演と上演を重ねてもいる。世阿弥の昔から仕立て(扮装)は能にとって大事な要素だが、近年の新作は少し衣装にこだわり過ぎていると思う。

①現代能「紫上」 10月2日。新津市に開場した新津美術館。

野外特設舞台。橋の会・練肉工房提携公演。深瀬サキ能作、岡本章構成・演出、浅見真州・野村万蔵節付。配役、光源氏

Ⅱ野村万蔵、紫上Ⅱ浅見真州、地頭Ⅱ浅井文義ほか。

②新作能「伽羅沙」細川ガラシャ 10月22日。東京赤坂のサントリーホール。梅若六郎舞台生活45周年記念特別公演。

梅若六郎原案・演出、山本東次郎作、水原紫苑構成、丸山比等史作曲、植田いつ子装束デザインほか。配役、小笠原少斎の霊・細川ガラシャの霊Ⅱ梅若六郎、高山右近Ⅱ梅若晋矢、細川忠興Ⅱ山本則直、所の者Ⅱ山本東次郎ほか。パイプオルガンも使用(松居直美)。

③新作能「オセロー」11月1日。能への誘い 仙台市市民会館。宗片邦義作詞、津村禮次郎作曲。配役、オセローⅡ津村禮次郎ほか。

④新作能「高山右近」11月14日。国立能楽堂。「高山右近」実行委員会制作。加賀乙彦作、野田暉行作曲、梅若猶彦演出、森英恵衣装、野村万之丞狂言台本協力。配役、老人・高山右近の霊Ⅱ梅若猶彦、右近の娘Ⅱ中森貫太、地頭Ⅱ泉嘉夫ほか。

⑤新作能「額田王」11月22・23日。国立能楽堂特別企画公演。馬場あき子作、観世栄夫構成・演出、高田倭男装束デザイン、臥牛氏郷能面作成。配役、幻ノ額田王Ⅱ梅若六郎、中大兄皇子Ⅱ大槻文蔵、大海人皇子Ⅱ観世暁夫、額田王Ⅱ山本順之、地頭Ⅱ観世栄夫ほか。

### 能とオペラの同時上演

11月27日、東京・錦糸町の「すみだトリフォニーホール・大ホール」開館記念公演の一つとして、総合演出Ⅱ観世栄夫、音楽監督・指揮Ⅱ高関健、演奏Ⅱ新日本フィルによる《能・歌舞伎・オペラによる『隅田川』》が開催された。〈愛しい幼な子を失った母の悲劇〉を綴った「隅田川」を、能・歌舞伎・オペラで一挙に上演しようという試み。能「隅田川」シテ観世栄夫・ワキ宝生閑ほか、歌舞伎舞踊「八重霞賤機帯」梅津貴昶・中村勘太郎・杵屋勝国・藤舎名生、ベンジャミン・ブリテン作曲のオペラ「カーリユリバー」郡愛子・平野忠彦・岡山広幸・坂本伸司・TOKYOFM少年合唱団、の同時上演で、所柄もびつたりの企画であった。

能とオペラの同時上演は、近年では平成6年1月に「谷行とヤーザーガー」が旧東京音楽学校奏楽堂で試みられ、同年6月に「隅田川とカーリユリバー」が梅若能楽学院と水戸芸術館で行われたことがあった。この試みについては平成6年の能界展望で取り上げることがあるが、能に触発されて創作された西洋のオペラと能との同時上演は、それぞれのジャンルの特色をより明確にし、その魅力を再検証する試みとして、今後盛んになるにちがいない。そして国際化が加速する二十一世紀には、ぜひブレヒト作「ヤーザーガー」や「カーリユリバー」に続く作品が生まれることを期待したい。

## 海外公演

能楽の海外公演も近年は年中行事化している。海外での能楽への関心も高い。私事で恐縮であるが、ヨーロッパ留学中、ロンドン・ブカレスト・ベルリン・ハイデルベルク・ミュンヘン・ヴェネツィア大学など、あちこちの大学から能や能面についての講演を依頼されたのもその現れであろう。ロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ・カレッジで開かれた研究集会の折、キャンパス内にある常設の本格能舞台で、装束を付けた学生たちが「鷹の井戸」の一部を演じ、終わって能面をはずし紅毛碧眼の若者の顔が現れた時、たしかに能楽は海を越えたと実感したものである。

また、南仏エクス・アン・プロバンスで、喜多流の狩野丹秀氏(のち琇鵬と改名)が同市へ寄贈した能舞台での、喜多・宝生流の方々による「巴」「船弁慶」を鑑賞し、終演後のレセプションで演者と土地の世話役の方々と夜を徹して交流した時も、フランス人の能楽熱を強く感じた。熱烈な世話役の一人は、エクス・アン・プロバンスをフランスはもちろん全ヨーロッパにおける能楽の発信基地にしたいとスピーチした。こうした熱烈歓迎を目にするにつけても、海外公演に尽力した先人たちの苦勞を思い、と同時に、選りすぐった曲目と、世界の批判に耐え得る、恥ずかしくない高水準の芸を披露してほしいと思う。以下、主な公演を列記する。

① 《ブラジル―日本能楽公演団》梅若猶彦団長。サンパウロ

で新能を開催。6月5日から8日。同公演は天皇・皇后陛下のブラジル訪問にあわせて同国の文化団体から招かれ、国際交流基金からの援助によるもの。梅若猶彦・橋岡久馬ほかの出演。ブラジルでの演能は初めての由。

② 《喜多流能楽団》塩津哲雄団長。ノルウェーのオスロで公演。ノルウェーのオスロのウルティマ・フェスティバルの招聘によるもので、旧「果水会」同人五人を中心に結成。10月7・8日の両日。国際交流基金・スカンジナビアニッポンササカワ財団・東京都歴史文化財団が後援し、十四世六平太記念財団と国立能楽堂が協力した。『能楽タイムズ』平成10年1月号に写真掲載。

③ 《観世流能楽団》観世清和団長。「'97フランスにおける日本」の公式プログラムとして、11月25日から12月2日まで、《フェスティバル・ドートンヌ》の招聘を受け九回の公演を行った。東京・パリ友好都市提携十五周年を記念し、フランス文化省とパリ市が主催したもの。詳細は『観世』平成9年10月号および『能楽タイムズ』平成9年11月号を参看されたい。(なお、平成11年1月、本公演の高い評価と日仏関係に新しい道を切り開いた功績により、観世清和にフランスから「芸術・文化勲章シュバリエ」が贈られた)。

④ 《梅若会能ヨーロッパ公演団》梅若恭行団長。オランダのアムステルダムと、フランスのパリ(ポンピドゥー文化センター)広場の野外特設舞台)で公演。6月21日〜23日(アムステルダム)、26日〜28日(パリ)。詳細は『能楽タイムズ』



平成9年4月号参照。

⑤《宝生流能楽団》宝生英照団長。パリとモスクワで公演。

6月11日～16日。東京パリ友好都市十五周年記念公演・モスクワ日本庭園能・モスコビエト劇場能。事前に雛子と能の解説があり、鑑賞の手引となった由。詳細は『宝生』平成9年6月・7月号(宝生楽屋通信)を参照されたい。

各地で建碑

【金剛流発祥之地の顕彰碑】

金剛流の人々にとって、かねてよりの念願であった「金剛流発祥之地」の顕彰碑が、奈良県生駒郡斑鳩町当局の尽力により、同町龍田神社の境内に建立され、2月11日に除幕式と金剛巖「神楽式」の奉納がおごそかに行われた。その由来と歴史については山路興造「斑鳩町に金剛流発祥地の碑建立」(『金剛』148号・平成9年1月)が詳しく、当日の様子は同誌149号(5月)などに報告されている。

【世阿弥佐渡状の碑】

佐渡博物館内「世阿弥配流の碑を建てる会」の尽力により、佐渡に流された世阿弥が娘婿の金春大夫(禪竹)に宛てた六月八日付け自筆書状(永享七年一四三五)の発信。奈良県生駒の宝山寺所蔵)を刻んだ石碑が、同館前庭に建立され、7月24日に除幕式が行われた。また同館の開館四十周年記念と「世阿弥佐渡状の碑」建設にともなう協賛記念事業として、前日に文化講演会「佐渡と世阿弥」が開かれ、映像鑑賞「配所・

佐渡の月」増田正造、「晩年の世阿弥」松岡心平、「佐渡と能楽」表章の各氏による講演があり、除幕式当日は観世清和ほかによる「佐渡能」が催された。また特別企画「世阿弥書状展」(7月24日～8月3日)も開催された。

なお、建碑に至る経緯や各氏の寄稿・記念式典の様式・報告などをまとめた『世阿弥佐渡状の碑 建設記念誌』(世阿弥配流の碑を建てる会・11月30日)が発行された。佐渡の世阿弥をしのぶ貴重な資料である。

武蔵野女子大学公開講座

武蔵野女子大学能楽資料センター(センター長小林責氏)の開設二十五周年を記念し「能・狂言―二十一世紀に向けて」のテーマのもと、五月と六月に公開講座が開催された。題目と講師は「能の国際的展開」増田正造、「世界の中の狂言」野村万作、「世阿弥と現代」友枝昭世、「新しい時代に生きる狂言」小林責の各氏。ほかに、能・狂言公演が「棒縛」野村萬齋・石田幸雄ほか、仕舞(井上雄人・狩野了一)、「箕被」野村万作・石田幸雄の番組で行われた。

同研究所は、文献資料が主体の私ども能楽研究所がカバーしえない現代の視聴覚資料を中心に発足した能楽資料センターである。月日の流れの迅速さを思うとともに、今後とも、同センターならではの活動を期待したい。

第二回法政大学能楽セミナー

法政大学大学院と能楽研究所主催の法政大学大学院公開講座第二回法政大学能楽セミナーが《式楽への道のり》をテーマに開かれた。題目と講師は、「室町將軍と能―東山文化期を中心に―」西野春雄、「秀吉・家康と能―桃山期から江戸初期へ―」片桐登(11月1日)、「能『石橋』再興事件―寛永期の能―」田口和夫、「綱吉と能―元禄前後の能界―」竹本幹夫(11月8日)、「観世元章の時代―統制の中での深まり―」山中玲子、「写楽?・斎藤十郎兵衛―その地位に見る幕末の能界―」表章(11月15日)の各氏。史資料を駆使して写楽の実像に迫る表所長の発表は、推理小説を読むような迫力があり、面白かった。毎回百名前後の受講生が集まり、一般市民の能楽への関心の高さを実感した。

### 山口の鷺流狂言国の無形文化財に

山口市野田神社に伝わる鷺流狂言が、5月23日付けで、文化財保護審議会から「国の記録作成等の措置を講ずべき無形の文化財」に指定するよう答申された。

山口鷺流狂言は萩で生れ、鷺流狂言を伝受されていた毛利藩お抱え狂言師春日庄作が、明治十九年四月、野田神社に奉納したのを機に、山口へ移住したものと伝えられている。ご存じのように、鷺流には本家仁右衛門派と別家伝右衛門派の二派があるが、山口の鷺流は伝右衛門派の芸系に属する。

現在、昭和四十二年に結成された山口鷺流狂言保存会(代表・水野文雄氏。会員十四名)によって継承保存されている。

### 一色能が文部大臣賞受賞

室町時代から今日に至るまで毎年3月11日、伊勢市の一色神社例祭に絶えることなく奉納され四百五十年の伝統を誇る「二色能」が、平成九年度地域文化功労者として文部大臣賞を受賞し、11月7日、東京一ツ橋の如水会館で授賞式が行われた。一色能保存会(土谷喜八郎会長)による、伊勢神宮への奉納能、三重能楽祭り、各地での公演活動、同会所有の能面・能装束の具有形文化財指定、後継者の養成、とりわけ五ヶ年後継者育成計画の遂行など地域文化振興への功績が顕彰されたものである。

### 襲名

和泉流狂言方の井上松次郎氏が三世井上菊次郎を襲名し、7月13日、第三十九回朝日狂言会(朝日新聞社・名古屋狂言共同社主催)で、その披露として「才法」を演じた。

### 栄誉・受賞など

- 《春の褒賞・叙勲》 4月29日付
- ◎紫綬褒章 シテ方観世流 観世鏡之丞氏。
- ◎勲五等双光旭日章 大鼓方石井流宗家代理 谷口正喜氏。
- 《秋の褒賞》 11月3日付
- ◎紫綬褒章 早稲田大学演劇博物館館長 鳥越文蔵氏。
- 《重要無形文化財個人指定保持者(人間国宝)》

5月23日付けで狂言方和泉流の野村万蔵氏が認定された。文化庁文化財保護部伝統文化課発表の資料を左に記す。

和泉流狂言師六世野村万蔵(重要無形文化財「狂言」保持者)の長男として生まれ、幼少より父の薫陶を受け、昭和九年初舞台を踏み、同二十五年四世野村万之丞を襲名し、平成五年七世野村万蔵を襲名している。この間、多くの優れた舞台成果を挙げ、芸術祭奨励賞、芸術祭優秀賞をそれぞれ受賞し、昭和四十七年に重要無形文化財「能楽」(総合指定)保持者に認定され、五十五年観世寿夫記念法政大学能楽賞、六十二年日本芸術院賞、平成六年紫綬褒章を受けるなど、その技法はきわめて高く評価されている。さらに、社団法人能楽協会常務理事、社団法人日本能楽会理事といった要職を歴任しており、後継者の要請にも尽力している。

右に付け加えるならば、観世寿夫氏を中心とした「冥の会」の結成に参画しギリシャ悲劇『オイデプス』などや泉鏡花『天守物語』などにも出演するなど他ジャンルの活動にも意欲的で、平成九年・十年年度の芸団協会長に就任されている。著書に『狂言―伝承の技と心』(一九九五年・平凡社)がある。

◎第47回芸術選奨文部大臣賞 シテ方観世流 観世鍔之亟氏。

◎関東甲信越地域放送文化賞 横浜能楽堂館長山崎有一郎氏。

◎第39回CBSクラブ賞 狂言方和泉流 井上禮之助氏。

◎名古屋市芸術賞 芸術特賞 シテ方観世流 梅田邦久氏。

◎第15回京都市文化賞 功労賞 シテ方観世流 片山慶次郎

氏。奨励賞 シテ方観世流 片山清司氏。

- ◎第16回京都文化賞 シテ方金剛流 今井清隆氏。
- ◎京都市芸術文化協会賞 ワキ方高安流 谷田宗二郎氏。
- ◎京都市芸術新人賞 大鼓方石井流 河村 大氏。
- ◎大阪文化祭賞 文化祭賞 シテ方観世流 梅若万紀夫氏。奨励賞 シテ方観世流 河村栄重氏。
- ◎大阪知事賞 シテ方観世流 梅若善高氏。
- ◎上方芸能人顕彰 狂言方大蔵流 善竹弥五郎氏。
- ◎第30回北国芸能賞 狂言方和泉流 野村英丘氏。
- ◎第18回松尾芸能賞 新人賞 狂言方和泉流 野村小三郎氏。
- ◎第1回織部賞 岐阜県知事賞 狂言方和泉流 野村万之丞氏。
- ◎第19回観世寿夫記念法政大学能楽賞  
山梨大学教授 橋本朝生氏。  
シテ方観世流 大槻文蔵氏(別記彙報参照)。
- ◎第9回催花賞  
新城狂言同好会会長 大原紋三郎氏(別記彙報参照)。

### 能楽協会・日本能楽会関係

#### ◎能楽協会

【役員構成】(『能楽協会名簿』平成9年版(平成8年12月1日発行)による)

《理事長》 片山九郎右衛門

《常務理事》 梅若六郎・坂井音重・武田志房・櫻間辰之・廣田泰三・香川靖嗣・宝生閑・亀井忠雄・山本則直

《理事》 浅見真州・守屋泰利・寺井良雄・金剛永謹・大村定・福王茂十郎・一噌仙幸・鶴澤速雄・三島元太郎・中村喜彦・野村万之介

《常務理事・東京支部長》 高橋 章

《理事・名古屋支部長》 野村又三郎

《同・北陸支部長》 山田太佐久

《同・京都支部長》 片山慶次郎

《同・大阪支部長》 大槻 文蔵

《同・神戸支部長》 吉井 順一

《監事》 渡邊 三郎・松 常太郎

【会員数】 一四三一名

〔シテ方〕 観世流605 金春流144 宝生流114 金剛流95

喜多流60 小計一〇一八名

〔ワキ方〕 高安流24 福王流21 宝生流28 小計73名

〔笛方〕 一噌流11 森田流49 藤田流6 小計66名

〔小鼓方〕 幸流27 幸清流11 大倉流18 観世流8 小計64名

〔大鼓方〕 葛野流13 高安流14 大倉流11 石井流11 観世

流2 小計51名

〔太鼓方〕 観世流15 金春流25 小計40名

〔狂言方〕 大蔵流84 和泉流35 小計119名

支部別 東京620 名古屋94 北陸52 京都190 大阪253

神戸65 本部扱(支部に属さない会員)157

\*ここ数年の会員数と比較して、ゆるやかに減少している。

◎日本能楽会

【役員構成】

《会長》 金春信高(シテ方金春流)

《常務理事》 観世清和・宝生英照・金剛 巖・喜多六平太・

宝生 閑・金春惣右衛門・善竹幸四郎

《理事》 野村四郎・井上嘉久・大槻文蔵・高橋 汎・辰巳

孝・廣田隆一・大島久見・福王茂十郎・貞光義明・藤田大

五郎・鶴澤 壽・宮増純三・安福 建雄・山本孝・観世元

信・野村又三郎

《監事》 一噌庸二・松 常太郎

【会員数】 三六九名

〔シテ方〕 観世流173 金春流8 宝生流32 金剛流10

喜多流17 小計240名

〔ワキ方〕 高安流9 福王流5 宝生流5 小計19名

〔笛方〕 一噌流5 森田流12 藤田流2 小計19名

〔小鼓方〕 幸流9 幸清流5 大倉流7 観世流2 小計23名

〔大鼓方〕 葛野流5 高安流5 大倉流5 石井流4

観世流0 小計19名

〔太鼓方〕 観世流5 金春流9 小計14名

〔狂言方〕 大蔵流24 和泉流11 小計35名

物 故 者

●関根直孝氏

シテ方観世流。9年1月6日、心不全のため越谷市登戸の自宅で死去。享年87歳。二四世観世左近に入門。『観世』平

成9年2月号に追悼記事。

●善竹圭五郎氏

狂言方大蔵流。9年1月18日、虚血性心不全のため、東京目黒区の国立第二病院で死去。享年78歳。大正7年9月15日生まれ。茂山(のち善竹に改姓)弥五郎の五男。大正13年「鞠猿」で初舞台。昭和33年12月「釣狐」を初演。47年「素襖落」と48年「望月」のアイで芸術祭優秀賞を受賞。兄の大蔵弥右衛門を助け、東京における宗家系勢力の確立に尽力。はじめ生硬な芸であったが、近年老熟の風を加えていった。日本能楽协会会员(昭和47年以來)。『能楽タイムズ』平成9年3月号、『観世』3月号に追悼記事。

●森本司郎氏

シテ方観世流。9年1月30日、肝臓癌のため福岡市城南区の病院で死去。享年68歳。日本能楽协会会员(昭和57年以來)。『観世』平成9年5月号に追悼記事。

●藤井久雄氏

シテ方観世流。9年2月11日、心筋梗塞のため、神戸市中央区の自宅で死去。享年89歳。明治40年3月14日兵庫県に生まれる。浦田保清氏に師事。昭和54年勲五等双光旭日賞受賞。著書に『久雄のたわごと―鶏肋抄』(私家版)。日本能楽协会会员(昭和40年以來)。『観世』平成9年5月号に追悼記事。

●鶴澤 雅氏

シテ方観世流。9年2月16日、脳梗塞のため、東京都品川区の自宅で死去。享年83歳。大正3年1月6日千葉県に生ま

れる。兄は小鼓方大倉流の鶴澤壽氏。大正14年観世華雪に師事。15年「忠信」の立衆で初舞台。昭和5年「俊成忠度」で初シテ。雅雪を支え、晩年は鍔仙会の長老として重きをなした。61年勲五等双光旭日賞受勲。日本能楽协会会员(昭和40年以來)。『観世』平成9年5月号に追悼記事。

●奥 善助氏

シテ方観世流。9年3月13日、目黒区の国立東京第二病院で結腸癌のため死去。享年78歳。橋岡久太郎・観世雅雪に師事。昭和2年「桜川」子方で初舞台。昭和五年「花月」で初シテ。淡交会・鍔仙会を中心に活動。日本能楽协会会员(昭和53年以來)。『観世』平成9年6月号に追悼記事。

●田中傳左衛門氏

歌舞伎長唄囃子田中流十一世家元。9年3月16日、老衰のため死去。享年89歳。本名奥瀬孝。十世傳左衛門の次男として明治40年7月17日東京に生まれる。父に師事。大正末頃から能楽囃子に傾倒、昭和7年に小鼓方大倉流十三世大倉六蔵(後に長右衛門)の門弟となる。これは歌舞伎囃子方が能楽囃子方の家元から正式に免状を受けた最初の事例。昭和21年に十一世を襲名。優れた演奏家であるとともに研究家としても知られ、昭和39年に歌舞伎囃子協会を設立、協会長に就任した。53年に重要無形文化財各個指定(人間国宝)に認定。大鼓方葛野流亀井忠雄氏の岳父。著書に『囃子―十一世田中傳左衛門聞書』(昭和58年)。『観世』平成9年6月号に追悼記事。

## ● 鶴澤 壽氏

小鼓方大倉流長老。9年3月30日、胃潰瘍のため東京千代田区の病院で死去。享年88歳。北村一郎に師事。能楽養成会の主任講師などを歴任。日本能楽会会員(昭和53年以来)。昭和57年に重要無形文化財各個指定(人間国宝)に認定された。春風のような温和な芸風で知られた。二月に亡くなられた鶴澤雅氏は実弟。『能楽タイムズ』平成9年6月号に追悼記事。

## ● 寺井 啓之氏

笛方森田流長老。9年4月10日、肺炎のため死去。享年85歳。本名・三千雄。明治維新後の能楽衰退期に家元を助けた寺井三四郎の長男として東京に生まれる。寺井家十二世。寺井鉦次郎・寺井政数に師事。昭和6年「金札」で初舞台。能楽協会理事・同常議員・国立能楽堂研修主任講師などを歴任。日本能楽会会員(昭和40年以来)。長男の久八郎は同流笛方、次男良雄氏は宝生流シテ方、三男栄氏は観世流シテ方。

## ● 田村信一郎氏

金剛流シテ方長老。東京金剛会代表。9年4月18日、脳梗塞のため死去。享年81歳。二世金剛巖に師事。日本能楽会会員(昭和40年以来)。『金剛』150号(平成9年9月)に追悼記事。

## ● 敷村 鐵雄氏

観世流小鼓方。9年4月19日、肝硬変のため死去。享年66歳。観世新九郎流十五世を継いだ宮増豊好(本名石浦通宏)の長男として東京に生まれる。父に師事。昭和6年「金札」で初舞台。国立能楽堂能楽(三役)養成研修講師などを歴任。日

本能楽会会員(昭和50年以来)。同流家元の宮増純三氏は実弟。故実にも明るく筆も立ち『宝生』に随筆を連載したこともある。

## ● 櫻間辰之氏

金春流シテ方。9年6月9日、心不全のため、東京渋谷区の病院で死去。享年56歳。本名、瀬尾。葛野流大鼓方瀬尾乃武の長男。野村保・櫻間道雄・櫻間金太郎に師事。昭和28年「鞍馬天狗」牛若で初舞台。昭和33年、櫻間道雄の芸事養嗣子となる。昭和44年瀬尾に復姓。櫻間龍馬に師事し、平成元年櫻間金太郎(龍馬)の芸事後継者として櫻間辰之を名乗り、金太郎没後、櫻間会を主宰した。会の維持存続に力を注ぐなか病いのため56歳の若さで急逝。同流瀬尾菊次は実引。日本能楽会会員(昭和61年以来)。『能楽タイムズ』平成9年7月号、『金春月報』99年8月に追悼記事。

## ● 野村祐丞氏

狂言方和泉流。9年6月12日、急性心不全のため、金沢の病院で死去。享年85歳。本名、能村。金浦扇丈・七世野村万蔵に師事。昭和50年、北陸狂言会結成の中心となる。日本能楽会会員(昭和53年以来)。軽妙な芸風で、北陸和泉流の重鎮だった。

## ● 田中正夫氏

能楽写真家。9年7月5日、急性呼吸不全のため、死去。享年86歳。京都・大阪を中心に主に関西で能楽写真を撮り続けた。『観世』9年10月号、『能楽タイムズ』平成9年6月号に追悼記事。

## ●丹下直典氏

シテ方観世流。9年7月21日、直腸癌のため、京都府立医大附属病院で死去。享年69歳。観世流準職分。日本能楽会会員(昭和57年以来)。『観世』平成9年11月号に追悼記事。

## ●瀬尾乃武氏

大鼓方葛野流。9年10月14日、心筋梗塞のため、東京都豊島区の自宅で死去。享年98歳。明治32年9月25日、東京に生まれる。川崎九淵・亀井俊雄・飯島佐乃六に師事。大正13年「三輪」で初舞台。昭和44年に宗家預かりとなり、昭和59年に重要無形文化財各個指定(人間国宝)に認定された。独自の風格を備え、静かな曲に特段の味わいを見せた。日本能楽会会員(昭和40年以来)。長兄要は宝生流シテ方、次兄潔は幸流小鼓方として活躍した能楽一家で、長男桜間辰之・次男瀬尾菊次氏ともにシテ方金春流の中堅として活躍されているが、六月に辰之氏が逝去され、涙のかわかぬうちの悲しみであった。『観世』9年12月号、「朝日新聞」平成9年11月4日夕刊に追悼記事。

## ●寛 三男氏

笛方藤田流。9年12月21日、死去。享年76歳。日本能楽会会員(昭和53年以来)。名古屋を中心に活躍した。